

オーストラリア/ケアンズには慌てて購入した往復航空券で行ってしまった。

その時に、『日本から海外へは、“急遽ただし安く”行くのは実に難しい』という事を学んだはずなのに、またやってしまった。オーストラリア大陸に行ったので、次は最後の大陸、南米に行こうと決めていたのだが....

オーストラリアでは全豪オープンを逃したので、ブラジルのカーニバルこそ、と思っていたのだがまたしても時間切れなのだ。今度は安いチケットはあったものの、ビザ取得に時間が掛かるのだった。

日本でボーッとしていると、そのまま廃人になってしまいそうなので、取りあえずインターネットで調べてみた。ブラジルが絶望的なのに、やはり心は南米に向いていて、『チリ/イースター島』というのが目についた。

実を言うと、今回の放浪は台湾ではなく、インドネシアからスタートしている。

インドネシアからニュージーランド、フィジー、タヒチと回り、そこからイースター島、チリ本土と回って南米へ、というルートを昨年の7月にイメージし、ガイドブックまで買っていたのだった。

ところが急にインドネシアから台湾に行かざるを得ない事情があって、そして台湾から中国、モンゴル、ロシア、ヨーロッパを回る事になってしまったのだった。

シュノーケルを持ってモンゴルにいてどうする、という笑えない話もあったのだが、今度こそ、イースター島だ。

安いチケットを探したが、さすがに南米は遠いだけあって、そして緊急発券という事情もあってチリのサンチャゴまで、15万円というのをを見つけるのがやっとだった。実に家計を圧迫するのだが、社会人の夏休みではなかなかいけない地域なので、思い切る事に。

余談ながら、サンチャゴまでは無茶苦茶遠い。往復すると、そのマイレージで東南アジアを往復できるのだった。それがせめてもの救いかもしれない。

結果として、日本滞在わずか数日というタッチ&ゴーであったが、その間に豚丼もラーメンも寿司も食べた。なんか、食べられないという状況に置かれると、その思いはリバウンドで大きく効いてくる。

普段そんなに頻繁には食べないのに、そしてもはや牛丼じゃないのに、何故か食べに行ってしまう。

そして事後報告ながら、あれだけ運動したにもかかわらず、今回の出発の時には何故か体重がケアンズ合宿前とほとんど変わっていない、そんな自分がけっこう怖い....

## アメリカへ

アトランタ行きのデルタ航空 56 便に乗り込む。

新型のボーイング 777 は、3 列、3 列、3 列になっている。

私が長距離路線に乗る場合、気兼ねなくトイレに行きたいので必ず通路側の座席を取る。また同時に他の人にも睡眠を邪魔されたくないなので、中央の通路側を取る事にしている。今回の様に中

央が 3 列の場合だと、真ん中の人は反対側から出てくれる可能性もあって、一度も起こされないで済むかもしれないという死守すべき席なのだ。

その為に空港には比較的早く行ったにもかかわらず、その席はことごとく無いのだった。

座席は予約の段階でできるので、まあやむなしと思ったが、機内に乗り込んでみて気が付いた。そのポールポジション、ことごとくアメリカ人が占めているのだ。日本人とアメリカ人の乗客比率は半々にも関わらず…。

まさか、アメリカ人には優先的にその席を確保する訳じゃないよね、デルタさん。

結果として私は、左側 3 列の通路側だった。

隣は日本人のにーちゃんだ。乗客がほぼ着席した頃、こののにーちゃんが、

「この帽子、上の棚に入れてもらえませんか」

とスチュワーデスに頼んだ。

自分でも立てば届くのだが、既にシートベルトをしていたこともあって気軽に頼んだのだろう。

ところが、その日本語のわかるスチュワーデスは、

「わたしでは届きませんから」

そう言って、ピシャリと断ったのだ。

他人事ながら驚いた。

届かないから何だと言うのだ。

「代替りの者を呼んでできます」、「別に場所に収納します」が、「届きませんから」という言葉の後に続くのが普通だろう。

JALの方がよく、靴を脱いで、肘掛けの下のちょっとしたスペースに足を乗せて棚の荷物を整理するのを見てきた。そこまでしなくても良いが、全面拒絶はないだろう。

隣の彼もシュンとしながらも、首をかしげていた。

さすがはアメリカ人らしいぜ(などと思ったが、アメリカ人でもこうするかなあ)。

因みにそのスチュワーデスは、それほど背が低くない。

さて、まあ、ビールでも飲んで、と思ったが、デルタ航空では国際便にもかかわらず酒が有料だそう。

先のスチュワーデスが日本語で曰く、「ビールはチャージしますよ」とそっけない。

言葉ってのは難しい。そう言われると、何か嫌な感じが残る。そしてケチりたくなる。

ビールもワインも 4 ドルもしくは 500 円とのこと。まあ安チケットなのでこれは仕方のない事かもしれないが。

夕方に出発したこの便は、日本時間の深夜に、だんだんと外が明るくなって来る。

窓側の乗客の中には窓を開けっ放しで寝てしまう人がいて、全開の窓からは眩しい日差しが機内に入ってくる。JALの場合、スチュワーデスが、長い棒を持ってきて、窓を 1 つ 1 つ閉めて回るのが、デルタの場合、そんな気の利いた事はしないみたいだ。

もちろん、ライトを点けて寝てしまう客のスイッチを切ってあげるというコマーシャルの様な事

もしない。

## アトランタ

日本を 20 日の 17 時前に出た飛行機は、同日の 15 時過ぎにアトランタへ到着する。12 時間半のフライトだ。

さすが被テロ国家アメリカ。荷物を一旦受け取り、改めてチェックインする。手荷物検査は厳重で、靴まで脱いだのは初めての経験だった。

チャンチャゴ行きの飛行機は、とても乗り継ぎが悪く 22 時に出る。アトランタ空港で 7 時間も時間を潰さなければならない。

機内でビールを飲めなかったのが、空港で飲もうとすると、今度は 7 ドルと言われ、またもや断念。ファーストフードも結構いい値段になっている。成田も異常に高いが、アトランタも負けてはいないようだ。

しかし、メキシコ系の移民と思われる家族たちが空港のレストランで食事している一方で、円高の日本人が躊躇している。思わず、武士は食わねど高楊枝、などと訳の分からない事を連想してしまう私であった。ただの貧乏という噂もある。

空港のイスは、ご丁寧に 1 つ 1 つに肘掛けが付いていて、横になる事が全く出来ない。床に寝込む人もいたが、さすがに武士道を重んじる日本人の私にはできない。本音を言うと熟睡して鼾をかきそうなので私は止めておいた。疲れ果てている上に腹も減るという結構辛い 7 時間。さすが南米行き、まったく甘くないぜ。

## チリ/サンチャゴへ

アトランタ~チャンチャゴ間は 9 時間半のフライト。同じくデルタなので、これまた酒は飲めない。

成田を出てから 30 時間、家を出てからだと 35 時間掛けて、ようやくチリ/サンチャゴに到着した。

因みに、元商社マンのくせに、私は飛行機が大嫌いなのだ。

電車では熟睡するくせに、どうも機内ではあまり深く眠れない。昔の私なら、南米に行くなら途中で相当刻んで行くだろうが、モンゴルのバスに揺られて頭を打ち、パンチドランカーになりそうな 20 時間という過酷な経験をしてみると、今回は多少疲れてはいたが、案外大丈夫な体になっていた。慣れとは恐ろしいものだ。

ただ、帰りが怖い。今テレビでやっている『白い巨塔』の文庫 5 冊を成田で買っておいた。ゆっくり読んだのだが、既に 3 巻まで読み切ってしまうのだった。家から持ってきた文庫 2 冊も読んでしまった。読み物はあと 5 冊しかない。

デルタの最新鋭機は、一人一人にモニターが付いていて映画も見れるのだが、何となく今一つの感があり、あまり気乗りしない。でもどの飛行機会社でも『Mr.ビーンズ』をやるのはどうしてだろう。

## ここでチリの概要

- 1.面積； 756,000km<sup>2</sup> (日本の約 2 倍)
- 2.人口： 1,505 万人 (2002 年)
- 3.首都： サンチャゴ
- 4.人種： スペイン系 75%、その他の欧州系 20%、先住民系 5%
- 5.言語： スペイン語
- 6.宗教： カトリック (全人口の 88%)



15 年前にアメリカを旅していた時に、ユースホステルでチリ人と話した事がある。私にとって初めてのチリ人だった。

「チリって行った事ないんだけど、どんな国だい？」

「細長い国だ」

(おいおい、そんな事は小学生でも知ってるよ、そんな事を聞いているんじゃないよ、と思いつつ)

「日本は島国だけど、実は結構、日本も南北に長いんだぜ」

「チリは長い。日本なんて短い」

と威張る様に返って来た。

そう言えばこいつ、白人のくせして、同室の白人から何だか煙たがられている。

これが私にとって、チリという国の第一印象だったものだから、それ以降、あまりチリに興味を持たなかった。結果として、ワインと銅の国、くらの知識しか持っていない。



空港のイミグレーションでは、最新のシステムが導入されている。顔を機械で撮影するのだ。パスポートの顔写真もスキャンするようだ。

そしてパスポートとモニターの写真を照合している(と思う)。

私の番になって、女性担当官が妙に首をかしげる。私だけ、既に 5 分も立たされている。

どうも同一人物とみなされていない様だ。確かにパスポートの写真は 1998 年のものだから、あれから相当ダンディーになっているのは自他ともに認めるところではあるが、チリ国の機械までそう認識しているようで、“不一致”を示している模様。

あれこれ聞かれるが、あまり聞き取れない、と置いていたら、この担当官、スペイン語交じりに質問していたのだった。

相手もいい加減疲れてきた様で、「もういいから行け」みたいな事になり、最後にスペイン語で一言、「xxxx、xxxxx」と言い放った。

何だか、「あんた、太ったね」と聞き取ってしまったのだが、そんなスペイン語を知らないのに不思議なものである。

## バス

空港からの青いバスで市内へ行く。

郊外から市内に入ると、道路には、黄色と白に塗られたバスが多くてびっくり。

日本の深夜の都内では、タクシーが洪水の様に走っているが、チリのバス版。その数は異常と思えるほど。

聞けば、そのほとんどが個人経営らしい。認可を受けて、決められたルートを守るらしいのだが、何しろまず台数が多い。そして1回でも多くそのルートを回ろうとするので、結果として街にあふれているのだった。



バスの車体も、個人経営らしくぼろが多い。エアコンなどは無いのが一般的な様だ。黒煙も撒き散らしている。

そして、一人でも多くの客を乗せようとするので、割り込み、追い越し、急発進、急停車と何でもありだ。実際、自分の乗っていたバスが、個人のバスと接触し、こちらのサイドミラーが飛んでしまった。東南アジアのように、クラクションの洪水という訳ではないが、運転は実に荒っぽい。

このバスに乗るのも、またこのバスを相手に車を運転するのちょっと怖いなあ。

## 地下鉄

一転、地下鉄は事情が違う。

ぼろバスを見ていたせいか、汚い地下鉄をイメージしていたが、とても清潔で近代的だ。

日本の地下鉄よりも確実にきれい。

値段が面白い。一番長いと 20 数駅行く事が出来るが、全て均一料金。ところが、時間帯によって値段が違う。通勤通学時の朝夕は 400 ペソ(80 円)、普段は 310 ペソ(62 円)なのだ。

現在はさらに路線を増やし、距離も延長しているそうだ。本数も頻繁にあって、完全に庶民の足になっている。



ガイドブックによると、何でもこの地下鉄は、フランスの協力で作られたとか。構内にはサムソンのテレビが置かれている。

## 市街の様子

まずはホテル探し。どうやら安い宿は、旧市街と言われる場所に多いようだ。これまで旧市街というと、常に高いイメージがあったのだが、ここでは逆だった。

理由は、旧市街は古いヨーロッパの建物が古いものの、あまりメンテナンス状態が良くなく、そして新しい住居も混在して、街としては何だか暗くて汚いからであった。どちらかと言うと貧民街という感じのする場所もある。

一方、新市街には、ビジネス街と高級住宅地が混在している。高級ホテルもこちら側にある。

最初に雑然としている旧市街を見て、チリの第一印象を持ってしまっていたので、新市街に行ってみてきれいな街並みに驚いた。歩道も広く、緑もたくさんある。落書きは皆無で、ゴミも犬の糞も落ちていない。

移民の国にありがちな貧富の差が如実に表れているのかもしれない。

言ってしまうと、東欧の薄汚い街と、西洋の明るい街の違いが1つの都市を形成しているのだ。

因みに、私の宿は、ヨーロッパ風の重厚な建物を改造したビルで、それなりに趣があるが、古くて汚いところ。

値段は4000ペソ(800円)と安い。ただし、もちろんドミトリーである。

週末にはパーティーをやっていて、みんなでビートルズなんかを唄っている。

しかし、英語の会話ばかりではない。スペイン語で話している連中だと、会話に参加する糸口すら掴めないのは困った事だ。



旧市街。道路も歩道も狭い。昔は路面電車が走っていたようだ。建物は2階建てが多く、高層ビルはほとんど無い。



新市街。高級住宅地では、一軒一軒が広く、プールがあるお宅も。ビジネス街では立派なビルが立ち並ぶ。

## MERCADO CENTRAL

MERCADO つまりマーケットに行ってみた。

『中央市場』という割には小さい。古くからある建物だそうだが、小学校の体育館くらいかもしれない。それでも魚を中心とした個人商店の並びを通ると、散々声を掛けられる。

中央にはレストランが並ぶ。

既に11時半。日曜日なので、特に混雑するかもしれないと思い、適当に店を選び席を確保した。実はこのチリ、長い海岸を持っているだけに、豊富な魚がある国なのだ。

サンチャゴには日本料理屋は、4、5軒あるらしいが、実にうまい刺し身が食べられるそうだ。

雲丹を注文してみる。雲丹は当地では、エリッソ(Erizo)というらしい。

入った店では、5980ペソ(1200円)という値段が付いていた。他の海鮮料理もほとんどがこの程度の値段だ。

チリと言えども、魚介類が圧倒的に安い訳ではない様だ。まあ、ここは何だかありがちな観光用のマーケットという雰囲気もあるのだが...

1200 円分も雲丹だけを食べれないので、ハーフにしてもらった。しかし出てきたのは、比較的大きな皿に盛られて雲丹、雲丹、雲丹。日本の高級店の寿司屋さんで出る雲丹に比べると少し大味であるが、全然問題ない。このお店、泣ける事に、醤油とワサビが出てくるのだった。

そしてサルサの様なちょっぴりからいソースと、玉ねぎ + コリアンダーの薬味が何とも言えない。そして、チリでは欠かせないレモン。1 個を半分に切ったものを 8 個も持ってきた。

これをたっぷり絞って、玉ねぎ + コリアンダーに掛けると実にうまいのである。



このお店、泣ける事に、何と醤油とワサビが出てくるのだった。醤油はもちろんキッコーマン。

このマーケット、さすがは南米だ。見た事のない魚もたくさん並んでいた。そしてその魚を使った料理がショーケースに並んでいる。

また建物の片隅には香辛料のお店がある。様々な香辛料が小分けにして売られている。その中には白い粉で【AJINOMOTO】というのまであった。

この市場の建物の外に出て、川を渡りさらに進むと、さらに巨大なマーケットが現れる。先ほどの建物はマーケットのごく一部らしい。ガイドブックにはそんな事は書かれておらず、こちらの方は、見逃す人が多いかもしれない。

洋品店や日用品が並んでいる場所を過ぎると、肉、野菜、果物がところ狭しと並んでいる。庶民の台所を反映して値段も安い。

鶏肉、豚肉、牛肉が、だいたいキロ 1500 ~ 2000 ペソ(300 ~ 400 円)で売られている。最近の日本の 5 分の 1 くらいだ。特に日本人にとっては牛肉が安く感じる。

果物も安い。レモン、オレンジ系の柑橘類、すいか、ぶどう、桃など、何でもあり、値段は様々だが、日本の 10 分の 1 くらいではなかろうか。

マーケットの一角にソフトクリーム屋さんがあった。

値段は 200 ペソ(40 円)。

南米特有の強い日差しにこの値段という理由だからだろう、たくさんの子供連れが集まっている。

親は両手に買出しの荷物を持っていて、ちょっと一休みと言う感じだ。

それにしても安い。



【CHOCOLATE】しか単語がわからなかったのでチョコレート味を頼んだ。結構うまいのだ、これが。

食材はとても安いのに、レストランに行くと仕上がりの料理は、妙に高いのだった。庶民がたまに行くような普通の店のメインの料理が大体 4000~8000 ペソ(800~1600 円)である。現地人にしては高いはずだ。もちろん絶対額としてはヨーロッパに比べると安いのだが、食材と料理の値段のギャップが、ヨーロッパと同じ感覚の様な気がしてアジア人の私はどうも納得が行かない(ただし、スーパーに並んでいるお惣菜系の料理はとても安く感じる)。

CD やビデオ、プレステなども露天に並んでいた。ドラゴンボールなど、日本のアニメがあり、よくぞ地球の裏まで旅してきたなあと感心してしまう。

### サン・クリストバルの丘

サンチャゴは東にアンデス山脈がそびえているが、街自体は盆地だ。ただその盆地にポツコリと小山がある。サン・クリストバルと呼ばれる丘で、自然公園として整備され、標高 880 メートルの山頂にはマリア像が設置されている。サンチャゴの市街は 600 メートル弱だから、300 メートルほどを登る事になる。山頂には、ケーブルカーとロープウェイがあって、何だか箱根の強羅~早雲山みたいだ。ただ、このケーブルカーはものすごい急勾配を登っていく。立ち席のみというのも面白い。因みに 700 ペソ(140 円)。

山頂に到着して驚いた。私は何の疑問も持たず、ケーブルカーに乗ってしまったが、自転車で山頂まで来ている人の多い事、多い事。なんちゃってトライアスリートの私としては、麓から自転車で来るべきだった。せっかく先日までケアンズで合宿したというのに...。以前屋久島を旅した時に、自転車を持ち込んで、毎日1周(約100キロ)にチャレンジした事がある。世界遺産に指定されている西部林道という場所は、海拔ゼロメートルから300メートルまで一気に登るコースで、まさにここにそっくりなのだ。その達成感は格別で、まさに目の前のチリ人たちはそんな顔をしている。

眺める景色は絶景だ。

ガイドブックには、「サンチャゴはスモッグがすごく、たった80キロしか離れていないアンデスが見えないほど」と書かれている。

この日は日曜日で交通量が少ないにもかかわらず、残念ながら確かに雪のかぶったアンデスは見られなかったが、サンチャゴ市街が見渡せて実にすがすがしい思いだった。

お土産やさんも数軒ある。イースター島のTシャツや、チリらしく銅細工のものが多い。



チリの真ん中に位置するサンチャゴの様子。人口550万人が暮らしている大都会だ。

下山はロープウェイ。2~4人乗りの小さなやつだ。因みに1000ペソ(200円)。結構古くて、ドアが空いてしまうのが怖い。ロープウェイの道の途中では、木が成長して、ロープウェイにあたってしまうところは、南米人のあまりこだわらない気質だろうか。

### 職探し

チリに進出する日本企業が増えているそうだ。

何軒かのホテルに聞いてみると、

「日本人従業員は現在いないが、日本人を雇う事に興味がある」

というコメントが返ってきた。

日本料理屋さんでも、日本人を雇いたいという話だ。

さらに日系の旅行代理店に行き、話を伺ったところ、この旅行代理店では、ツーリスト業の他に、不動産および貿易(ワインなど)を手がけているらしい。そして日本人を募集していると。

給与は、400ドル。昼食費・健康保険・労働ビザの供与、住居費のほか各種手当が付くそうだ。物価が安いとはいえ、日本人としては安い印象を受ける。ただ、社員の方々はとても生き生きと働いていた。

あれこれ注文をつけなければ、職は確実にあるようだ。ワインがうまいチリ。海のもの山のものが豊富なチリ。年間300日晴の日があるというチリ。

地方には温泉があるというチリ(残念ながら今回ばかりは行けない)

日本からだいぶ遠いが、今後移住する人も増えるかもしれない。

たぶんつづく